

ロシア語の受身文について

— 不定人称文と受動文の機能の差を中心に —

水野 庄吾

京都大学大学院人間・環境学研究科

1. はじめに

ロシア語において、不定人称文は伝統的に受動文の機能的シノニムとされ、その意味的類似性から受身¹のカテゴリーの中で扱われることがある。しかし、不定人称文は、完了体動詞から作られる受動過去分詞を用いた受動文や不完了体動詞から作られる再帰型受動文という受身文とは異なり、統語的には能動文である以上、これらとの関係をどのように扱うかという問題があった²。この問題に大きな進展をもたらしたのは、1970年に、И. А. Мельчук と А. А. Холодович によって提唱された диатеза (diathesis) の理論である (Мельчук, Холодович 1970)。диатеза とは、文の参与者の意味的な構成要素 (主体, 客体, 道具, 受け手など) と、統語的な構成要素 (主語, 補語など) との相関関係を示したものである (Холодович 1970: 13; Храковский 1970: 31; Храковский 1981: 5; Храковский 1991: 142; Храковский 2004: 506)。この диатеза に基づいて、Храковский は、ロシア語の受身文を、動作主=主語の関係が、能動文から受身文に変換されるときに崩れ、動作主=客体として表されるか全く表示されないものとしている (Храковский 1974: 13; Храковский 1991: 148)。一方、従来、主に着目されてきた動詞の形態によって表される受身のことを залог の1つと定義し直すことで、диатеза は залог の上位カテゴリーとなった (Холодович 1970: 13; Храковский 1981: 5)。すなわち伝統的な分詞型受動文・再帰型受動文と不定人称文は、同じ「受身 диатеза」という意味のカテゴリーで捉えられるようになったのであり、この「受身 диатеза」の下位カテゴリーとして、能動形か受動形かという動詞形態 залог が設定されたのである。

しかし、この диатеза の理論に基づいて不定人称文を捉え直した研究はあまり数が多くない。また диатеза という理論の導入から分詞型受動文・再帰型受動文と不定人称文の類似性、関連性については大きな進歩を得たわけであるが、その一方で分詞型

¹ 本論では、диатеза のレベルで、つまり意味のレベルで пассив と認められるものを「受身」、一方、動詞形態的に、つまり залог のレベルで пассив と認められるものを「受動」と呼ぶことにする。つまり本論で扱う不定人称文は、動詞形態的には、受身形を用いる訳ではないため、受身文ではあるが、受動文ではないこととなる。一方、不完了体動詞から作られる受身を意味する ся 動詞を用いた пассив や、完了体動詞から作られる受動過去分詞を用いた пассив は受動文であり、受身文の下位分類に属することとする。

² 不完了体動詞の受動過去分詞を用いた受動文が、また完了体の再帰動詞を用いた受動文が用いられることは稀であるため、本論では扱わない。

受動文・再帰型受動文と不定人称文の差異についてはあまり明らかにされていない³。そこで本論では、分詞型受動文・再帰型受動文と不定人称文の類似点と相違点について、情報構造の観点に着目し、明らかにする。また村越（2018）や Shibatani（1985）などの先行研究では、受身文を「動作主の脱焦点化」として捉えているが、これについては情報構造の観点から着目すると、修正すべき点が認められるため、本論ではロシア語受身文の再定義を行う。なお本論で使用する例文は、ナショナルコーパス（Национальный корпус русского языка⁴）と主要新聞社オンライン版⁵から収集したものの、そしてそれを基に筆者が作成し、複数のネイティブスピーカーにチェックを受けたものである。

2. 先行研究：受身文の定義

受身文の定義は *диатеза* という理論の導入で大きな進展を見ることとなった。それまでの受身研究では、目的語が主語に繰り上がる、元々の主語が斜格や前置詞句となる、また動詞が形態的に受身形となることが受身の定義であった。そのため受身は通言語的ではなく、受身が存在しない言語も多々あると考えられていた。しかし、*диатеза* の導入により再解釈を受け、受身文とは、動作主＝主語の関係が、能動文から受身文に変換されるときに破棄され、動作主＝客体として表されるか全く表示されないものとなったのである。その結果、それまでの受身文の定義は *залог* レベルでの受身の定義となり、*залог* は *диатеза* の下位カテゴリーとなった。つまり *диатеза* のレベルにおける受身では、受身の存在しない言語はなく、受身は通言語的に普遍的な現象として捉えられるようになった。ロシア語においては、この *диатеза* の導入によって、意味的には受身文に近くなるが、動詞の形態的に受動形が現れないゆえに、受身のカテゴリーとしてはそれまで捉えられなかった不定人称文を *диатеза* のレベルでは受身文として捉えることが可能になった。

しかしながら、Храковский も指摘しているように、「受身文とは、動作主＝主語の関係が、能動文から受身文に変換されるときに破棄され、動作主＝客体として表されるか全く表示されないもの」という定義だけでは、厳密には不定人称文は受身文としては認められないだろう（Храковский 1981: 6）。なぜなら不定人称文とは動作主が不定であり、主語として表示されないだけであって、あくまで動作主の統語役割が変化することはないからである。

Храковский は、不定人称文についてさらに研究を進め、Храковский（2004）で新たな前進を見た。Храковский（2004）では、まず、能動文と受動文では話者の強調点に差があることを指摘し、不定人称文にも受動文と同じような話者の主体への強調の低下の効果があることから受動文と不定人称文には相関性があるとしている

³ なお、本論では、分詞型受動文と再帰型受動文についての類似点、相違点については詳細には立ち入らない。

⁴ 以降、НКРЯと呼ぶ。なお全ての例文について、最終確認日は、2020年10月10日である。

⁵ 具体的には、РИА Новости、ВЕСТИ、SPORTS.KZの例文を用いた。

(Храковский 2004: 513). この話者の強調点についての考え方は Shibatani (1985) で指摘されている動作主の脱焦点化と同じような論だと考えてよさそうである (Shibatani 1985: 831-832). また村越 (2018) では、ロシア語と日本語の受身文の対照研究において、この動作主の脱焦点化に着目し、ロシア語の受身文である受動文と不定人称文、また日本語の受身文についてもこの動作主の脱焦点化が大きな役割を果たしていることが明らかにされている (村越 2018: 43). つまり、ロシア語の受動文や不定人称文という受身文は、他の言語との対照言語的な観点においても、「文の焦点が動作主から他の意味役割に移動するもの」と捉えられているのである。以上をまとめれば、Храковский (2004), Shibatani (1985), 村越 (2018) 等の先行研究において、広く捉えれば、受身文は「動作主の脱焦点化」として説明されてきたのである。

ここまでを整理すると、ロシア語の受身文とは、Храковский 以来、2つのレベルが設定される。まず、受身の上位概念として「動作主の脱焦点化」が起こった文を、「受身 диатеза」とし、さらに「受身 диатеза」に属するものの中で、動詞形態的に受身になるものを залог レベルでの受身 (本論ではこれを受動と呼ぶことは上記脚注 1 で確認した通りである) と定義することで受動文と、伝統的に受動文の機能的シノニムとされてきた不定人称文を統一的に捉えることが可能になった。しかし、ここで浮かぶ疑問は、それでは受動文と不定人称文にはいかなる差があるのか、また受動文という受身の機能を果たす典型的な文が存在するのにも関わらず、不定人称文が存在することを支えていると考え得る不定人称文の構文的特徴とその役割とは一体、いかなるものであるかということである。

3. 情報構造

以上までで、ロシア語の受身文の定義は、「動作主の脱焦点化」として説明されてきたことを確認した。しかしながら、この「動作主の脱焦点化」という分析には修正すべき点がある。

3.1. ロシア語の動作主

まず動作主についてである。Jackendoff (1972) は、動作主という意味役割について「動作主とは、文によって表現される出来事や状態を意志や意図を持って引き起こすものであり、これを担うのは、通常、有情名詞である」とし、以下の(1)~(4)のような例文を挙げている (Jackendoff 1972: 32).

- (1) The rock rolled from the dump to the house.
- (2) John rolled the rock from the dump to the house.
- (3) *The rock deliberately rolled down the hill.
- (4) John deliberately rolled down the hill.

(1)の主語である、The rock は当然、意志、意図を持って、「転がる」という動作を引き起こしたわけではあるまい。従ってここでの The rock の意味役割は主題と考えられる

べきであるが、(2)の文では、John が意志、意図を持って、「転がした」ということがわかるため、John は動作主、the rock が主題と考えることができる。一方(3)では、主語の The rock が意志を持って、「故意に」転がることはないため、変則的な文であるが、(4)では、主語が有情名詞であるため、deliberately と共起されることをいとわない、そしてこの John がまさに動作主となるのである。

しかしながら、逆に主語の役割を果たす有情名詞が常に動作主の意味役割を果たすわけではない。例えば、以下のような例文である。

(5) John broke the vase. (筆者による作例)

(5)では、John は意図的に花瓶を割ったとも考えるが、必ずしもそういうわけではないだろう。偶然、持っていた花瓶を落としてしまって、割れるということもあるわけである。つまり、前者の意味での John は動作主、後者の意味では原因主となるのである。

つまり実際には、能動文の主語として現れる意味役割は何も動作主だけではない。能動文の主語としては、動作主の他にも、原因主、経験主、主題などが考えられ、さらにこれらを主語として要求する動詞から受身文を作ることが可能である。

例えば、ロシア語の受動文と不定人称文では、想定される「意味上の主語」が異なることがよく知られている。Храковский は、受動文では、造格で表される「意味上の主語」として想定されるものとして、人間、動物、自然の力があるのに対して、不定人称文では、文字通り「不定人称」、すなわち不定名詞が「意味上の主語」として想定されるため、「意味上の主語」としてあり得るのは、不特定の人間のみであるとし、以下の例文を挙げている (Храковский 2004: 514) ⁶。

(6) Лодка была опрокинута.
boat-NOM was overturn-PASS

(7) Лодку опрокинули.
boat-ACC overturn-PST.3.PL

「船がひっくり返された。」

(6)の例文では、「意味上の主語」として、人間、動物、自然の力が想定されるのに対して、(7)の例文に関しては、「意味上の主語」として想定されるのは不特定の人間のみであるという。つまり、(6)、(7)の例文についてそれぞれ、対応する能動文として、以下(6')、(7')の文が想定されるということである。

⁶ 自然の力などによる受身の意味としては、無人称文 (Лодку опрокинуло) でも似たような意味を表すことができるが、無人称文は本論では考察の対象としない。

(6') Кто/Что опрокинул(о) лодку. (筆者による作例)
 who/what-NOM overturn-PST.3.SG boat-ACC
 「誰かが/何かが ボートをひっくり返した。」

(7') Кто опрокинул(и) лодку. (筆者による作例)
 who-NOM overturn-PST.3.SG boat-ACC
 「誰かがボートをひっくり返した。」

ロシア語の受動文は、このように、有情名詞以外の自然の力などが「意味上の主語」として想定されることから考えても、動作主以外の意味役割が「意味上の主語」として想定されることを妨げない。すなわち受身文を捉えるには「動作主」の脱焦点化という説明では、不十分だと言える⁷。

3.2. ロシア語の焦点

次に「脱焦点化」についてである。Shibatani (1985) は、焦点という用語は様々な意味で用いられるため、他の用語も検討した上で、この「脱焦点化」という用語を選択している。Shibatani が選択した「焦点」は、主語>直接目的語>間接目的語>斜格の順に強さの程度が決まっているとしており、情報構造で用いられる焦点とは、異なるようである (Shibatani 1985: 832)。そこで本論では、情報構造の観点から、これを捉え直し、ロシア語の受身文について明らかにすることを試みたい。情報構造において、焦点とは、一般に「新情報を表す文中で最も重要な要素」である (上山 2016: 30)。また一般的にロシア語の基本語順は SVO とされる⁸。さらにロシア語では、Comrie (1989: 78) が述べるように、通常、文末焦点の原則 (上山 2016: 30) に従うことが多いため、基本語順において文頭に立つ主語が元々焦点であるとは考え難い。なお文末焦点の原則とは、以下のような原則である。

(8) 「文末焦点の原則」 (上山 2016: 30)
 重要なもの、あるいは焦点と見なされるものは文末におかれる。

ロシア語でも、(8)の原則に従うことは、以下の(9),(10)の例文からも確認できる。

⁷ Shibatani (1985) は、「動作主の脱焦点化」の「動作主」とは、伝統的に定義されている「意図を持って行う主体」とは異なり、経験者や所有者という意味役割を含めて「動作主」と呼ぶとしている (Shibatani 1985: 833)。つまり、動作主以外にも経験者、所有者という意味役割も想定されているが、本論で扱うロシア語の不定人称文は、動作主、経験者、所有者も含め、いかなる意味役割を主語として要求する動詞であっても、人間でありさえすれば、不定人称文として用いることを厭わない。そこで本論では、Shibatani の「動作主」を拡張し、「基主語」という考え方を提示する。「基主語」については、4章において、後述する通りである。

⁸ ロシア語の基本語順をいわゆる SOV とするものもあるが (van Gelderen 2003)、本論では一般的な考え方である SVO を基本語順とする (Bailyn 2003; van Gelderen 2003)。

- (9) Кто убил утку? — Утку убил Джон.
 who-NOM kill-PST.3.SG duck-ACC duck-ACC kill-PST.3.SG John-NOM
 「アヒルを殺したのは誰ですか — アヒルを殺したのはジョンです。」
 (筆者による作例)

- (10)⁹ Читал книгу.
 read-PST.1.SG book-ACC

В 1996 году повесть была **опубликована** в журнале «Октябрь».
 in 1996 year story-NOM was **publish-PASS** in journal «October»

Повесть была **удостоена** премии журнала «Октябрь» за 1996
story-NOM was **award-PASS** prize-INS journal-GEN «October» of 1996

год, **номинаровалась** на премию «Букер» и в начале 2003
 year **nominate-PST.REFL** for award «Booker» and at beginning 2003

года вышла самостоятельным изданием в серии
 year-GEN come-PST independent-INS publication-INS in series

«Современная библиотека для чтения» издательства
 «contemporary library for reading publishing company

«МК-периодика». Скажу от себя — фильм смотреть
 «МК-pjperiodika» say-1.SG from myself film see-INF

не стоит (смотрел) Фильм — драма. Книга — реальность. В книге
 not cost-INF (see-PST) film drama book reality in book

реально **описаны** события, которые вызывают и смех, и
 actually **describe-PASS** event-NOM which-REL call-3.PL and laughter and

слезы, и сожаления. В фильме — только слезы.
 tear and regret in film only tear (НКРЯ)

⁹ 以下の例文では、文内の項関係がわかりやすいよう、述部を太字に、主語、目的語、基主語などの述部に関係する名詞（句）に下線を付す。

「本を読んだ。1996年に物語は『10月』という雑誌に掲載された。物語は雑誌『10月』の1996年の賞を授与された、ブッカー賞にノミネートされて、2003年の初めにMKペリオジカ社の「読書のための現代叢書」シリーズとして単独本となった。個人的に言えば、映画は見る価値がない—映画は作品だ。本は現実である。本では、本当に描写されているのである。笑いも涙も憐れみをも引き起こす出来事が。映画では、涙のみである。」

(9)の文では、Джон убил утку. という基本語順に対して、新情報である Джон が文末にくることで焦点となっている。一方、基本語順において主語が担うのは通常、トピック¹⁰である。トピックとは、「話し手が聞き手に情報を伝達する場合に、話し手が文を用いてある事柄を述べる時、その対象となる人や物」(上山 2016: 24)であり、普通、旧情報がこれを担う。(10)の文では、「本を読んだ」(Читал книгу.)の「本」は新情報で焦点、「1996年に物語は『10月』という雑誌に掲載された」(В 1996 году повесть была опубликована в журнале «Октябрь».)の「物語」は前述の「本」を受けていて、旧情報でトピック、「物語は雑誌『10月』の1996年の賞を受賞された、ブッカー賞にノミネートされて」(Повесть была удостоена премии журнала «Октябрь» за 1996 год, номинировалась)の「物語」も旧情報でトピックである。「本では、本当に描写されているのである。笑いも涙も憐れみをも引き起こす出来事が。映画では、涙のみである」(В книге реально описаны события, которые вызывают и смех, и слезы, и сожаления. В фильме – только слезы)の「出来事」は倒置を利用して焦点化されている新情報である。

つまり、能動文での主語は通常、トピックであり、焦点ではない。よって能動文から受身文になる際に行われる主語の斜格化や削除は、もともと焦点であったものを焦点以外のものに変更する「脱焦点化」ではないと言える¹¹。

以上の2点から、ロシア語の受身文を「動作主の脱焦点化」として説明することは最善ではないと言えるだろう。

4. トピック基主語の脱落

Храковский (1991) は、1章で確認した диатеза の論の中で、各動詞語彙素には、「基礎 (исходная) диатеза」が存在すると述べている (Храковский 1991: 143-144)。ロシア語の各動詞は、その語彙的意味から主語として要求する基本的な意味役割を少なくと

¹⁰ トピックは、テーマや主題などと同義で用いられることもあるが、本論では、意味役割の「主題」との混同を避けるため、情報構造においては「トピック」という術語を用いることとする。

¹¹ なお、ктоのような疑問詞を用いる場合、これは文頭のктоが焦点となるが、これは、(9)の「強調ストレスや形態的にマークされた焦点要素を含まない文」から外れるため、本論では、扱わない。

も1つは持っている、動詞とその動詞語彙が要求する最も基本的な意味役割が主語として現れた状態を「基礎 *диатеза*」と呼んでいる。具体的には、以下のような例である。

- (11) Я получил письмо. (筆者による作例)
 I-NOM get-PST.1.SG letter-ACC
 「私は手紙を受け取った。」

(11)の例文では、「受け取る」という語彙的性質から、主語として要求する最も基本的な意味役割は「受益者」である。そして「受益者」が主語として現れているこの状態をまさに「基礎 *диатеза*」と呼んでいるのである。なおこの動詞と主語の関係が壊れたときに、「受身 *диатеза*」が得られることは2章で述べた通りである。

そこで本論ではまず、動詞の「基礎 *диатеза*」となる文を形成する際に必要となる主語(すなわち(10)の「受け取る」なら、「受益者」の意味役割を持つ主語である)をその動詞の「基主語」と呼ぶこととする。3-2で述べた通り、ロシア語の基本語順はSVOであることから、この基主語は通常、文頭に立つ。またロシア語では、通常、(8)の原則に従うことが多いことから、文頭の要素は、重要ではない要素、つまり文脈上共有された要素、旧情報であるトピックと考えられるべきである。

以上から、不定人称文では、トピックとして考えられる基主語が「不定人称」すなわち、不特定人物となり、文中に現れない、言い換えれば、「トピック基主語の脱落」と考えられるべきである。一方、受動文においては、不定人称文とは違い、能動文での基主語は必ずしも文中に現れないわけではない。いわゆる「意味上の主語」として斜格になって現れることもあるのである。つまり受動文においては、「トピック基主語が脱落する場合」と「トピック基主語が斜格になって現れる場合」の2つの場合があるということである。後者の例として以下の文を挙げる。

- (12) И еще. Эта книга написана человеком двадцати трех лет.
 and still this book-NOM write-PASS person-INS 23 years old-GEN
 (НКРЯ)
 「そしてさらに。この本は23歳の人によって書かれたのである。」

(12)の例文を見ると、*Эта книга*(S) *написана*(PASS) *человеком*(INS) *двадцати трех лет*(GEN) となっており、(8)の原則から、*Эта книга* がトピック、*человеком двадцати трех лет* が焦点であることがわかる。つまり、受動文において、「トピック基主語が斜格になって現れる場合」とは、「基主語の焦点化」と捉えられるだろう。

5. 受動文と不定人称文の類似性

ロシア語において受動文と不定人称文は共に受身の意味を表すので、一般的に受動文と不定人称文は類似性があると言われてきた。しかし実際には、上で確認したよう

に不定人称文は、「トピック基主語の脱落」と考えられるが、受動文においては、「トピック基主語の脱落」と「基主語の焦点化」の2つの場合がある。つまり、不定人称文と受動文の間に類似関係が認められるのは、受動文において「トピック基主語が脱落」している場合のみである。それならば、「基主語の焦点化」が起きている受動文とはいかなるものであるかという疑問が浮かぶ。そこで、さらに例文を見ながら、不定人称文、「トピック基主語の脱落」が起きている受動文、そして「基主語の焦点化」が起きている受動文のそれぞれの関係を確認する。まず不定人称文について確認したい。具体的には、以下のような例である。

- (13) У премьер-министра Михаила Мишустина **обнаружили** коронавирус.
at prime-minister Mikhail Mishustin **find-PST.3.PL** coronavirus-ACC
(РИА Новости : 2020 年 4 月 30 日)

「ミハイル・ミシュスチン首相にコロナウイルスを見つけた。」

＝「ミハイル・ミシュスチン首相にコロナウイルスが見つかった。」

(13)の例文では、場所の意味役割を担う前置詞句 (У премьер-министра Михаила Мишустина) が 3 人称複数過去形の動詞 (обнаружили) に先行し、動詞の目的語 (коронавирус) が動詞に続いている不定人称文である。この文は、不定人称文である以上、基主語が不特定人物であるため、「意味上の主語」として想定できるのは、「人」という情報のみであり、能動文にすることができない。この文では、(8)の原則に基づき、文頭に立つ場所句がトピック、さらに文末の目的語が焦点となっている。この文と類義的に用いられるのは、以下の(14)のような受動文である。

- (14) У Михаила Мишустина **обнаружен** коронавирус.
at Mikhail Mishustin **find-PASS** coronavirus-NOM
(ВЕСТИ : 2020 年 4 月 30 日)

「ミハイル・ミシュスチンにコロナウイルスが見つけれられた。」

＝「ミハイル・ミシュスチンにコロナウイルスが見つかった。」

(14)の例文は、(13)の不定人称文と同様に、受動分詞である обнаружен の基主語、つまり「意味上の主語」を想定することができないため、能動文にすることができない。この文では、(8)の原則に基づき、場所の意味役割を担う前置詞句 (У Михаила Мишустина) が文頭に立つことでトピック化され、受動文の主語である коронавирус が、焦点化されている。つまり、(13)、(14)のそれぞれの例文において、共に文頭の前置詞句がトピック、(13)の不定人称文では文末の目的語が、(14)の受動文では、文末の派生主語が焦点になっており、意味の上でも、情報構造の上でも共通性が見出されることがわかる。つまり不定人称文と、「意味上の主語」が現れない、言い換えれば、「トピック基主語の脱落」が起きている受動文との間に機能の面で類似性があることが確

認できる。

次に「意味上の主語」が文中に現れる，言い換えれば，「基主語の焦点化」が起きている受動文について確認したい．具体的には，以下の(15)のような例文である。

- (15) (У обычного человека, живущего в Германии, представление о России крайне негативное.)
Ненависть к России **воспитывается** средствами
negative-NOM toward Russia **raise-REFL.3.SG** means-INS
 массовой информации.
 mass-GEN information-GEN (筆者による作例)

「(ドイツに住んでいる普通の人にはロシアについて極めて否定的なイメージを持っている。) ロシアへの憎悪はマスメディアによって育まれている。」

(15)の例文の Ненависть к России **воспитывается** средствами массовой информации. は，Ненависть к России が主語，**воспитывать** の基主語である средствами が斜格となって，いわゆる「意味上の主語」となっている受動文である．この文は，以下の(16)のように言い換えが可能である。

- (16) (У обычного человека, живущего в Германии, представление о России крайне негативное.)
Ненависть к России **воспитывают** средства
negative-ACC toward Russia **raise-3.PL** means-PL.NOM
 массовой информации.
 mass-GEN information-GEN (НКРЯ)

「(ドイツに住んでいる普通の人にはロシアについて極めて否定的なイメージを持っている。) ロシアへの憎悪を育てているのはマスメディアである。」

(16)の例文の Ненависть к России **воспитывают** средства массовой информации. は，Ненависть к России が **воспитывать** の目的語，средства が **воспитывать** の主語である OVS 型の倒置文である．この倒置文は，(8)の原則から，基本語順である SVO から S を文末に移動させることで，S を焦点化した倒置文であると考えられる．ロシア語では，一般的に受動文と不定人称文の類似性が認められるとされてきたが，実際には，人称文の倒置文で S が焦点となった文である OVS 文と，形態的に受動になり，「意味上の主語」が斜格になることで文末に移動した受動文，の 2 文は類義的に用いられる．つまり，OVS 型の人称文と，斜格になって「意味上の主語」が表示されている，つまり「基主語の焦点化」が起こっている受動文との間に類似性が認められることとなる。

上述の通り、SVO から OVS への倒置は S の焦点化と捉えることができる。すなわち、OVS (S 焦点) と類似関係にある斜格主語表示の受動文も同様に、(8)の原則に従い、斜格で表される「意味上の主語」が焦点となる形式であると考えられることができる。一方、V に先行する要素、つまり、OVS 文の O と、受動文の派生主語は共に、(15)、(16)の文脈からもわかる通り、文脈から共有される旧情報であり、トピックであると考えてよいだろう。

以上のことを整理すると、ロシア語の受動文は、以下のような 2 種類の受動文に分けることができる¹²。

①まず、(14)の例文のように、トピック基主語が脱落しており、文からは対応する能動文が復元できない「トピック基主語の脱落」受動文である。上で確認した通り、これには、(13)のような不定人称文が類義文として対応する。

②次に、(15)の例文のように、基主語が斜格化し、動詞に後続することで焦点化した「基主語の焦点化」受動文である。上で確認した通り、これには、不定人称文ではなく、(16)のような OVS 型倒置文が類義文として対応する。

6. 不定人称文と「トピック基主語の脱落」受動文の差異

以上までで、不定人称文と受動文の対応関係について述べ、不定人称文は、「トピック基主語の脱落」が起きている受動文と機能上、類義関係をもつことを明らかにした。それでは、不定人称文と「トピック基主語の脱落」受動文が完全にパラレルに用いられるかということ実はそうではない。Храковский は受動になり得ない動詞として、非動作動詞を挙げている (Храковский 1981: 9)。確かに、通言語的に考えても多くの言語で非動作動詞からは受身文を作ることができないのは一般的な事実であろう。例えば、ждать や знать は一般的に受動で使われることはない。しかし、実際には、不定人称文として、意味上の受身を形成することは厭わない。具体的には、以下の例を参照されたい¹³。

- (17) Извините, меня ждут.¹⁴ (Поговорим в пятницу. И он повесил трубку.)
 sorry I-ACC wait-3.PL (HKPЯ)

¹² 動詞の体によって再帰型受動文と分詞型受動文が存在するが、共に「意味上の主語」は斜格形になり表示されることから、その情報構造については特に差がなく同じものとして扱ってよいと考えられるため、本論では受動文の動詞の種類については扱わないこととする。

¹³ ただし例文の(18'),(19'),(20')はそれぞれ(18),(19),(20)に対応する ся 動詞を筆者が作成して用いた非文である。

¹⁴ ждать の直接補語には生格を用いる場合と対格を用いる場合があり、揺れがある。この生格と対格の使用の差には、指示性が関係していると考えられる (水野 2020)。不定人称文では、文頭に立つ補語はトピック化していると考えられるため、この揺れはなくなり、対格のみが直接補語として使われることが想定されるが、詳細は論を改めて考察することにしたい。

「すみません、私を待っているんだ。(金曜日にお話しましょう。そして彼は電話を切った。)」

- (17') *Я ждусь. (筆者による作例)
I-NOM wait-REFL.1.SG

- (18) У Аршавина есть имя, которое знают в Европе, ему
 at Arshavin-GEN be name-NOM which-REL know-3.PL in Europe he-DAT
 будет легко со всеми.
 will be easy with everyone (SPORTS.KZ : 2020年6月16日)

「アルシャビンは、ヨーロッパで知られている名前を持っている、彼は誰とでもうまくやれるだろう。」

- (18') *имя, которое знает (筆者による作例)
name-NOM which-REL know-REFL.3.SG

- (19) (Когда сыр полностью растает, можно приступить к трапезе.)
Фондю едят специальными вилками,
fondy-ACC eat-3.PL specific-PL.INS fork-PL.INS
 (насаживая на них кубики хлеба и макая их в растопленную смесь.
 Не забудьте время от времени помешивать фондю. Если смесь будет сильно
 пузыриться, уменьшите подогрев.) (НКРЯ)

「(チーズが完全に溶けたら、食事を始められる。) フォンデュは特別なフォークで食べられる、(それらの上にパンの立方体を乗せ、溶けた混合物にそれらを浸して。時々、フォンデュをかき混ぜることを忘れないでください。もし混合物が強く泡立ったら、熱を減らしてください。)」

- (19') *Фондю ется (筆者による作例)
fondy-NOM eat-REFL.3.SG

(17)から(19)はいずれの文も基主語が脱落した受身文である。しかしながら実際には、(17), (18), (19)の例文は一般的な不定人称文であるが、それぞれに対応する受動文である(17'), (18'), (19')は非文となり意味をなさない。この差を生む要因とは、いかなるものであろうか。これについては、様々な検討の余地があると考えられる。ましてや ся 動詞にいたっては再帰、相互、自発などと並んで受身の意味が存在するのであって、上記の ся 動詞には、受身の意味がないのであるという考え方もできるであろう。事

実、ся 動詞は、約半数が受身の意味を持たないことを Храковский も指摘している (Храковский 1991: 149)。しかし、それならば、これらの ся 動詞は、受身の意味を持つ ся 動詞も数多く存在するなか、なぜ受身の意味を持たないのかという別の疑問が浮かぶこととなり、不定人称文と受動文の使用の差を明らかにすることには寄与しない。「これらの ся 動詞は、受身の意味を持つ ся 動詞も数多く存在するなか、なぜ受身の意味を持たないのか」などの疑問点については、今後の研究課題として、論を改めて考察することとし、本論では、不定人称文と「トピック基主語の脱落」受動文との間の「トピック基主語脱落の程度の差」に着目し、(17)から(19)の例文で見たような不定人称文と受動文の差異について論じたい。

不定人称文が「トピック基主語脱落」受動文と大きく異なる点としては、不定人称文では、脱落したトピック基主語 (不定人称文では、不特定人物) が、動詞の形態として、すなわち、3 人称複数形として、その存在感を残していることが挙げられる。つまり不定人称文では、たとえトピックであった基主語が脱落していても、3 人称複数という動詞の形態によって、脱落しているということが示されているのであり、このことこそが不定人称文はあくまでも能動文であること、そして(17)から(19)のような文を作ることを妨げないということの理由の1つであると考えられる。一方、受動文においては、受動分詞、もしくは ся 動詞からはトピックであった基主語の存在は全く窺い知れない。つまり、基主語が脱落していると言えども、その存在感を残していることから、不定人称文を「基主語の不完全脱落」と名付けるとすれば、受動文は、基主語の存在を他の要素からは全く窺い知ることのできない「基主語の完全脱落」と名付けられるだろう。つまり受動文では、トピック基主語は完全に構造から除外されていると考えられるが、これについては論を改めて、詳細に論じることとする。

さらに不定人称文では、目的語だけでなく、様々な要素が文頭に立ち、トピックとなることができる。上で挙げた(13)の例文では、まさに場所句が文頭に立ち、目的語が動詞に後続することから、(8)の原則に従って、場所句がトピック、目的語が焦点となっているということは、確認した通りである。一方で、(17)の例文では、目的語が文頭に立っている。これにも同様に、(8)の原則に従うことから、目的語がトピックであることがわかる。また全ての文は、必ず1つの焦点を持つことから (Erteschik-Shir 2007)、この文においては、動詞が焦点であると考えられる。つまり不定人称文では、語順を入れ替えるなどの操作によって、文の様々な要素をトピック化したり、焦点化したりと情報構造を変えることが可能である¹⁵。一方、受動文においても同様に語順によって情報構造の変更は可能であるが、受動文では、能動文での目的語が派生主語として主格になることが要求される。つまり単なる語順の変更や動詞が3人称複数形になるというような操作だけの不定人称文とは違い、主格を持つ意味や役割というものも考

¹⁵ (18)の例文では、目的語が文頭に立ち、トピックとなり、動詞が文末にあり焦点と考えられるが、それでは、いわゆる SVOC 文に副詞句がいくつか連なるような文から作られた長い不定人称文の情報構造はどうなるのかという疑問が浮かぶが、不定人称文の情報構造については、論を改めて考察することとし、本論ではこれ以上は扱わない。

慮しないといけないと考えられる¹⁶.

7. 結論

以上のように、本論では、ロシア語受身文の新たな定義を提案し、それに基づいて、不定人称文と受動文の関係、とりわけこれらの差異について、情報構造に着目し、考察した。

まず、受身文を捉える上で重要な概念として「トピック基主語の脱落」が挙げられる。この「トピック基主語の脱落」が起こった文は「受身 *диагеза*」に属すると考えられる。この「受身 *диагеза*」の下位カテゴリーとして、動詞形態上の分類、すなわち *залог* がある。不定人称文はこの *залог* のレベルでは、能動文に属する。受動文については、多くの場合はそのトピック基主語は脱落するが、斜格になり、焦点化する場合もある。この場合は「基主語の焦点化」と捉えられる¹⁷。なおこの役割は不定人称文には存在せず、受動文と不定人称文の差異を生む1つの要因である。つまり「トピック基主語の脱落」が起こっている受動文と不定人称文との間に類似性が存在するわけであるが、これらの間には「トピック基主語脱落の程度の差」が認められるのである。これを図示すると以下の図1のようになる。

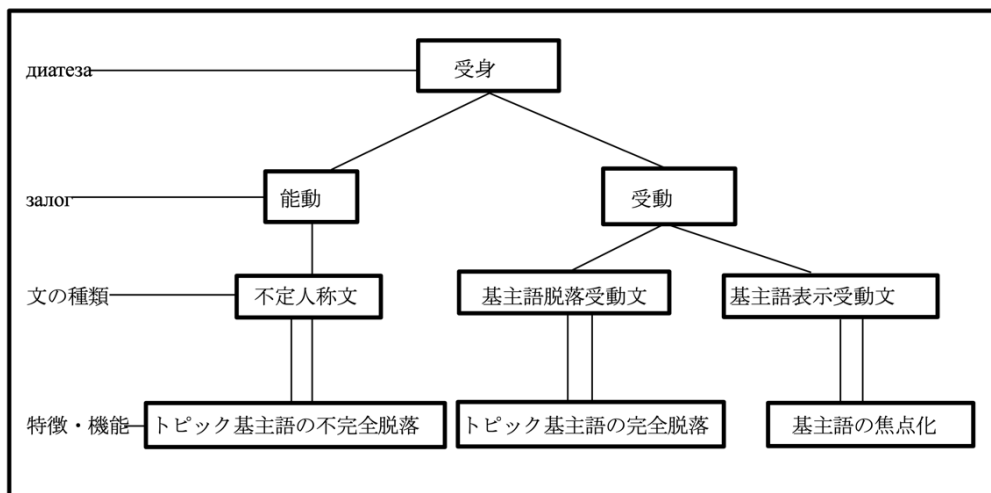


図1 受身文の相関関係

同時に、今後の研究課題も得られたと言えるだろう。残された研究課題とは以下のようによまとめられる。

¹⁶ なお不定人称文には、必ず語順の変更は必要となるのか等の疑問が浮かぶが、不定人称文自体の考察は論を改めて行うこととする。

¹⁷ 語順を変更することで情報構造の変更は可能であるが、本論では扱わない。

- ① **ся** 動詞が受身の意味を持ちうるか否かと本論で提示した受身の定義には関連性があるか.
- ② 不定人称文では用いられるが, 受動文では用いられない動詞の語彙にはどのような制限があるか.
- ③ 直接補語に生格と対格の揺れがある動詞の揺れは不定人称文になっても存在するのか.
- ④ 不定人称文と受動文では, 目的語が主格になるか否かという大きな差があるが, それでは主格がもつ意味, 役割とはいかなるものか.
- ⑤ 本論では, 不定人称文と受動文の差異化を図る中で, 情報構造に着目したわけであるが, 不定人称文, 受動文それぞれの情報構造はいかなるものとなるのか. いわゆる **SVOC** 文にさらに副詞句が連なった不定人称文の情報構造や「トピック基主語脱落」受動文の基主語はただ文中に現れないだけなのか, それとも「脱トピック化」しているのかなど.

これらの研究課題については今後の課題として論を改めて考察することとする.

略語

1	1 人称	GEN	生格	PASS	受動	S	主語
2	2 人称	INF	不定形	PL	複数	V	動詞
3	3 人称	INS	造格	PST	過去		
ACC	対格	NOM	主格	REFL	再帰動詞		
C	補語	O	目的語	REL	関係代名詞		

参考文献

- Bailyn, J.F. "Does Russian Scrambling Exist?" In S. Karimi (ed.) *Word Order and Scrambling*. Malden, Mass. Blackwell Publishing. 2003. 156-176.
- Comrie, B. *Language Universals and Linguistics Typology*. Chicago : The university of Chicago Press. 1989.
- Erteschik-Shir, N. *Information Structure: The Syntax-Discourse Interface*. Oxford: Oxford University Press. 2007.
- Gelderen, V. van. *Scrambling Unscrambled*. Ph.D. dissertation, University of Leiden. 2003.
- Jackendoff, R.S. *Semantic Interpretation in Generative Grammar*. Cambridge. MIT Press. 1972.
- Shibatani, Masayoshi. Passive and Related Constructions: A prototype Analysis. *Language* 61, NO.4. 1985. 821-848.

- Мельчук И.А., Холодович А.А.* К теории грамматического залога (определение, исчисление) // Народы Азии и Африки. 1970. NO.4. 111-124.
- Холодович А.А.* Залог I : Определение. Исчисление // Категория залога : Материалы конференции. Л. : Наука, 1970
- Холодович А.А.* (ред.). Типология пассивных конструкций. Л. : Наука, 1974.
- Храковский В.С.* Конструкции пассивного залога (определение и исчисление) // Категория залога : Материалы конференции. Л. : Наука, 1970.
- Храковский В.С.* Пассивные конструкции // Типология пассивных конструкций: Диатезы и залогов / Отв. ред. А. А. Холодович. Л. : Наука, 1974. 5-45.
- Храковский В.С.* Залог и рефлексив // Проблемы теории грамматического залога / Отв. ред. В. С. Храковский. Л. : Наука, 1978. 50-61.
- Храковский В.С.* Диатеза и референтность // Залоговые конструкции в разноструктурных языках / Отв. ред. В. С. Храковский. Л. : Наука, 1981. 5-38.
- Храковский В.С.* Пассивные конструкции // Теория функциональной грамматики: Персональность. Залоговость / Отв. ред. А. В. Бондарко. С. : Наука, 1991. 141-180.
- Храковский В.С.* Концепция диатез и залогов (исходные гипотезы — испытание временем) // 40 лет Санкт-Петербургской типологической школе. М : Знак 2004. 505-519.
- 上山泰男 (2016) 『機能・視点から考える英語のからくり』, 東京 : 開拓社.
- 神尾昭雄・高見健一 (1998) 『談話と情報構造』, 東京 : 研究社.
- 水野庄吾 「直接補語に生格と対格の揺れを持つ動詞について」, 大阪大学外国語学部卒業論文 (未刊行).
- 村越律子 (2018) 「日本語とロシア語の受身文の対照研究」, 『ロシア語ロシア文学研究』, 50, 37-58.

(みずの・しょうご)